湖北をいきいきさせる六つの顔

歌舞伎に顔見せという言葉がある。
芝居の正月にあたる十一月に、一
新しい役者の披露を行う年中行事だ。
狂言の開幕前に、役者が舞台に勢揃いして、
順番に口上を述べていく。
一年の芝居は、ここから始まる。
長浜みーなの新年号も、
湖北を舞台にいきいきと暮らす人たちの顔見せで始めよう。
北は西浅井町から南は米原町まで、
各町にはさまざまな顔がある。
最初に登場願う六人は、
仏様を彫る仏師、まちづくりの仕掛人、
お花を教えるお師匠さん、先端企業を支える社長さん、
音楽を教える講師、そして蝶を保護する活動家。
舞台に勢揃いした六人は、
猿之助や玉三郎のようなスーパースターではない。
いわば、湖北という舞台を盛り上げる名脇役だ。
それぞれにすぐれた個性と鍛え抜かれた技が、キラリと光る。
長浜みーなは、そんな名脇役を紹介するのが得意の分野。
湖北を支える六人の口上に耳を傾けてみよう。

木とノミと心で迎える観音像

仏師　岩佐　茂瑠（しげる）さん

観音の里

湖北の村々には多くの観音様が祀られている。渡岸寺の国宝十一面観世音菩薩をはじめとして、赤後寺、医王寺、石道寺等々。そしてその多くが村人の温かいお守りの中、静かにやさしく時を刻んできた。厳しく、美しい、湖北の四季の移り変わりの中で、力強く生きる村人達。観音様は常にその村人達の喜びや悲しみと共におられる。人と、菩薩と、自然が醸すやわらかな地域。いつ頃からであろうか、人々はここ湖北を、観音の里と呼んだ。

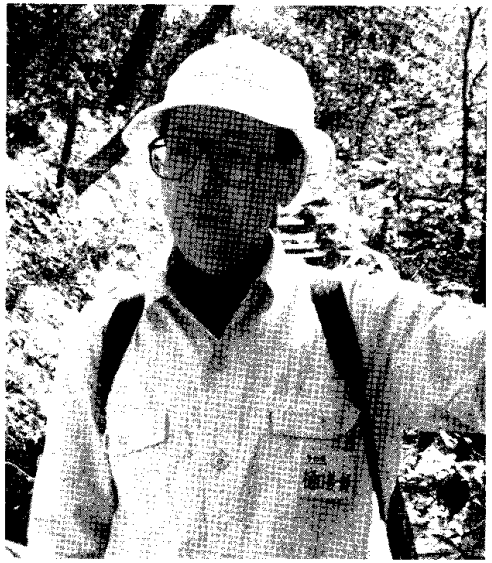
そのような里に、木と対座し、その中から仏が生まれるのを喜びとしてノミを構える青年がいる。仏師・岩佐茂瑠さん（39才）である。今の時代に仏師と呼ばれる職業が残っているとは信じがたい事であったが、十数年ぶりに出会った級友は、京都・丸条山で、京仏師・故松久朋琳氏のもとでの修行を終え、故郷へ帰って来た、まぎれもない仏師であった。以来何度か彼の仕事場を訪れる事となり、散らかった木屑の中、観音菩薩や不動明王の鎮座する空間に、何ともいわれぬ安堵感を覚えることとなった。

十六歳の出発

不思議な事に彼と私は中学校の三年間、ずっと同じクラスであった。しかしながら「おはよう」とのあいさつを交わした記憶がないほど、彼は無口でおとなしい生徒だった。卒業

蝶よ舞い立て！かぶと山から

近江町オオムラサキを守る会　**樋口善一郎**さん



▲オオムラサキの成虫（♂）

以前に新聞で、近江町の山手にオオムラサキという蝶の生息地があって、地元の子どもたちが人工飼育をしては自然に返しているという記事を読んだことがありました。その時の私の印象としては、新聞に取り上げて「ここにいますよ。只今幼虫を放しましたよ」と、世間に言いふらすようなことをしてもいいのかなという感じでした。近江町オオムラサキを守る会の代表・樋口善一郎さん（49才）にお会いして、話を伺うという得難い機会を与えられたものの、ちょこっとその辺りが気になっておりました。

とは申せ、取材が決まった時から、自分がオオムラサキという気品あふれる和名をもつこの蝶にグイグイ引きつけられていくのも事実なら、その蝶を守り育てようと十年以上にわたって地道に活動しておられる樋口さんその人にも非常な興味を覚えるのも事実であり、ともかく任務を遂行して、後は読者諸氏にお預けいたします。

オオムラサキを守る会結成

坂田郡近江町多和田のかぶと山（三〇八m）でオオムラサキやギフチョウの保護活動を続ける「近江町オオムラサキを守る会」は、昭和五十七年七月、同町内の庄司定三さんと樋口さんのたった二人で旗揚げ。

「当時は経済的に雑木林の価値がなくなり、スギやヒノキの植林が盛んに行われました。オオムラサキの幼虫のエサとなるエノキもどんどん切り倒されていき、放っておくとかぶと山でも絶滅しかねないと、本気で心配になりました。」

そんな折りも折り、かぶと山に自動車道路建設計画がもちあがりました。樋口さんたちは「住民の立場でオオムラサキを守り育てよう」とこの会を結成して、これまで調査研究や人工繁殖、環境保全の運動などに取り組んでこられたのです。

▲子供たちと一緒に幼虫のカウント調査をする

オオムラサキ（タテハチョウ科）
人呼んで『雑木林の英雄』
成虫はコナラ、アベマキの樹液を吸う。
幼虫はエノキの葉を食べる。
８月産卵、約１週間で孵化。
11月、落葉の下にもぐり込んで冬越し。
4月下旬、再びエノキに登る。
5月下旬から6月中旬、ササギになる。約3週間で羽化。
成虫が飛び回るのは、7月から8月上旬だけ。

ギフチョウ（アゲハチョウ科）
『春の女神』
発生は年１回。
最盛期はその地域のサクラの開花期とほぼ一致すると考えてよい。
カンアオイ類の葉に産卵。
晩春に幼虫は蛹化、そのままササギ状態で夏秋冬を越し、翌春に羽化。

舞い込む目撃報告

昨年は守る会結成十周年という記念すべき年で、七年間続けてきた春の放虫会では例年の二倍の約六百匹の幼虫が、かぶと山に放たれました。その甲斐あって、蝶の飛び回る七月には、「小山でオオムラサキをいっぱい見た」「家の中に飛び込んできたよ」などと、今までになくたくさんの目撃報告が事務局に寄せられました。ようやく成虫が増えてきたその証拠は、守る会の皆さんに何よりの慰安となっている様子です。

樋口さんとオオムラサキのお付き合いは、もう十八年になるそうです。

「生き物が大好きだった次男の相手をしてかぶと山に登った時に、初めてこの蝶を見つけたんです。鮮やかな紫色をまとう堂々たる翅体から、日本を代表する蝶として国蝶にも指定されているオオムラサキが、こんな身近な所にいたということに、まずびっくりしました。そして、この蝶のことを徹底的に調べてみる気になったんです」

これまで、近江町内の小中学校の生徒たちとは定期的に観察会を開いたり、人工飼育の指導を重ねる一方、かぶと山を訪れる子どもたちや家族連れに同行してお話やクイズもやったり。

「次代を担う子どもたちに、自然をいつくしむ目を育てていけたら……」という樋口さんの熱一い思いがうかがえます。

樋口さんのお話をお聞きしたのが十月二十五日。それから半月程がたち秋も深まった十一月十二日、再び多和田を訪ねた私は、小春日和のなか、樋口さんには内緒でひとり大宝神社裏からかぶと山に登ってみました。サクラの真っ赤な落ち葉とクヌギの実のころがる登り口から、ずっと尾根伝いに雑木林の中を歩きました。木の間から天野川下流の力強い反射光を見、東海道北陸道の穏やかな喧噪を聞きました。降りる途中、山懐に甍を並べる多和田の里を眼下にして、ああ絵になるなぁとしみじみ感じ入りました。

（朝日新聞、中日新聞のここ数年の熱心な取材記事を大いに参考にさせていただきました）

（藤田　喜久）